

## 文法形式の発達<sup>1</sup>

アントワヌ・メイエ著

甲斐崎 由典訳

文法形式 (forme grammaticale) が形成されるプロセスにはふたつのものがある。どちらのプロセスも言語学の知識がまったくない人でも知っているようなありふれたものであり、特別気にかけてはなくても誰もがおりにふれ自分で目にしたことがあるようなものである。

ふたつのプロセスの一方は類推である。類推とは、なにか他の形式をモデルとしてある形式を作り出すことである。例えば、フランス語の nous finissons・vous finissez・ils finissent (私達は・あなた方は・彼らは終える)<sup>A</sup>、 nous rendons・vous rendez・ils rendent (私達は・あなた方は・彼らは戻す)、 nous lisons・vous lisez・ils lisent (私達は・あなた方は・彼らは読む) というパターンが示されたとすると、言葉を習得中の子供は nous disons・ils disent (私達は・彼らは読む) に対して、一度もそのような形式は耳にしたことがないのに vous disez<sup>B</sup> という形式を作り出すようになるが、これを類推による形式という。ある言語の規則的な形式はすべて類推によるものということもできる。なぜなら、規則的な形式は既存のものをモデルとしてまず作り出され、そしてあくまでその言語の文法体系を大前提として、需要が生じるたびに再形成されるからである。一方でまた規則的な形式とはふつう自分で実際に見たことがある形式でもある。新たに作られたばかりの語やめったに使われない語の場合を除けば、文法体系の働きによって作り出された形式は、すでに耳にしたことがあって記憶にも残っている形式を忠実に複製したもの

---

<sup>1</sup> Scientia ( Rivista di scienza ) 第 12 号 ( 1912 年 ) 第 26 番 6。

であることが非常に多い。伝統方式と文法体系から要求されるものが一致しているのである。しかし上にあげた例のように、伝統方式と文法体系が一致しなくなり、ある時点におけるその言語の状況として複数の形式が可能となってしまうことがある。ここにおいて類推により伝統方式から離れた新しい形式が作り出される。一般にこのような場合類推による形式 (forme analogique) という言葉を使うが、類推による革新 (innovation analogique) と言った方が正しいかもしれない。

もうひとつのプロセスとは、自立した語が文法的機能を果たす要素に移行していく過程である。たとえば *suis* (～である) という語は、かなりぎこちない文ではあるが *je suis celui qui suis* (私であるものが私である)<sup>c</sup> では自立したひとつの語であり、また *je suis chez moi* (私は家にいる) のような文でもまだなんらかの自立語らしさを持っている。しかし *je suis malade*・*je suis maudit* (私は病気だ・呪われている) ではもはや文法的要素としか呼べないものに近づいており、さらに *je suis parti*・*je suis allé*・*je me suis promené* (私は出発した・行った・散歩した) では文法的要素以外のなにものでもない。この最後の場合 *suis* 自体にどういう意味があるか考えることはない、というか考えようとしても無理であり、誤って助動詞とも呼ばれるこの *suis* は、過去を表現する複合的な文法形式の一部分にすぎない。その一方でフランス語の歴史から、*je me suis promené* の *suis* が *je suis ici* (私はここにいる) の *suis* と同一の語であることは明白であり、それが文法形式を構成する要素へと変化していったというわけである。

新しい文法形式が形成されるプロセスには、これら類推による革新と、元自立語への文法的特性付加のふたつがあるだけである。個々の実例において細部を見るとわかりにくくなることはあるが、原理として機能しているものは常に同じである。

体系だった比較言語学が行われるようになってから今までの間に、ある時はふたつのプロセスのうちこちらを、またある時はあちらを重視するということ考え方はいろいろと変わってきた。印欧語比較文法の創始者である Fr. Bopp は、各言語のもっとも古い形式を調べていけば、その構成要素まで取り出せるような、いわば原始形式にたどり着く道が開けると考えていた。Bopp にとってはサンスクリット語の *émi*、ギリシャ

語のeimi、リトアニア語のeimiのような語を、「行く」を意味するaiと「私」を意味するmiという語に分析することはなんら不自然なことではなかった。証明は当然ながら無理としても、このような分析方法にも一理はある。しかしBoppはこうした分析のために、あまり正しいと思えないような例やまったく容認できないような例を他に多数提案することになってしまう。この方面における50年におよぶ無益な努力を経て、現在では文法形式の根本的な起源は我々の手の届く範囲外にあると考えられるようになった。知られている言語はどれもみな程度の差こそあれ後代に現れたものであり、大部分は近代以降にすぎない。しかもそれ以前の長い発達を思わせるような出来上がった形式に包まれてしまっている。文明の遅れた民族の言語が洗練された構造を持つことはよくあるが、それはそのような言語の背景にもっとも文明化が進んだ民族の言語に匹敵する長さの歴史があるということである。どんな言語をもってきたところで、「原始」言語としてどのようなものがありえたかについてなんの手がかりも得られない。したがって文法形式の根本起源の問題は、それを支持するようなデータをいくら持ちだしたところで、解決はもちろん着手することさえ正当化できないのである。言語学者は文法体系の変遷を研究するのであり、その体系の創造そのものには関わらない。ある語が文法形式の機能を持つものになったとき、ある意味で新しい形式が創造されたといえるであろうが、ここでの創造とはすでに完成された文法組織を示す言語の内部で起こったもので、文法組織の萌芽さえ見られない時期に起こりえたことについてはなんら知見を与えてくれないのである。とはいえ、文法形式の根本起源と思われるプロセスとして類推が定義からいっても該当しないとすると、残るは自立語や語の組み合わせ方に文法的機能が徐々に加わっていくプロセスしかない。その意味ではBoppも正しかったことは明らかであるが、歴史時代のデータにせよ比較言語学的手法によるデータにせよ、手元にある後代のデータを元に、現在知られている言語の様々な形式が初めてその今もっている機能を獲得した様子を垣間見ることができると考えたのは見当違いであった。

諸形式の根本起源を見極めることはあきらめ、もっぱらその発達をたどることを目標と決めた結果、言語学者は類推による革新の研究の方に

精力を傾けるようになった。なぜなら、一度できあがった文法体系は少しずつ形が変わっていくものであるが、このとき細部や、ときには体系全体の作りまで変えてしまう原動力として重要なのが類推だからである。1870年頃言語研究において、ふつう「青年文法学派」と呼ばれる新しい動きが起こったが、それには同一言語の時間的に相前後した音素の対応関係は常に一定である。これは「音法則」として知られている

というのと、類推による革新の重視というふたつの考え方が広く浸透していた。1878年にBrugmannとOsthoffはこの新しい考え方に基づいた研究を集めた叢書の刊行を始めたが、ふたりが選んだ書名はMorphologische Untersuchungen (『形態論研究』)であり、そこでもっとも紙面が割かれたテーマは類推であった。H. PaulのPrinzipien der Sprachgeschichte (『言語史原理』<sup>D</sup>)はこの新しい学派がよりどころとする諸原理を解説したものであるが、それも本質的には類推に関する理論である。さらに今は亡きV. Henryも、デビュー作となった類推に関する研究書によってフランスにもこの「青年文法学派」の考え方を広めようとした。

以来40年間、もう一方の革新過程である自立語から文法要素への移行に関しては、完全に無視というところまで行かなかったとはいえ、お世辞にもよく研究されたとはいえなかった。今新たな取り組みが始まりつつあるのは、そのような移行過程の重要性が誰の目にも明らかたためである。類推によって様々な形式の細部が一新されることはありえるが、既存体系の全体像まで変わってしまうことはまずない。これに対し、語の「文法化 (grammaticalisation)」が起こると、新しい形式が創造され、その言語にそれまで表現手段のなかったカテゴリーが導入され、体系全体の構成までが変わってしまう。しかしながら、このタイプの革新も類推による革新と同じく言語が使われていくうちに起こるものであり、そこから直接現れてくる結果として自然なものである。

文の本質とは何かを主張することである。文には必要な場合に主語、つまり主張する内容が誰について、あるいは何についてなのかを表す語

と、通常は述語、つまり主張の内容を表す語が含まれる。主語は聞き手も了解済みなら入れなくてもよいが、そういう場合として命令形がある。この形式は当然ながら聞き手に向けたものであるから、viens (来なさい・2人称単数) とか venez (来なさい・2人称複数) に主語は必要ない。viens, Pierre (来なさい、ピエール) のように呼びかけている相手にそれを伝えるのは、今誰に向かって話しているのか、状況からははっきりわからないときだけである。誰かを待っているとき、ロシア語では придёт<sup>E</sup> 「彼はまもなく来ます」、ラテン語では venit<sup>F</sup> 「彼は来ます」と言えばよく、状況や前の文からその誰かがわかっていれば他に示す必要はない。あるいは特に印欧語がそうであるが、動詞の形を見るだけでも誰をさすかはっきりわかることもある。ロシア語 придю<sup>F</sup> 「私はまもなく着きます」、ラテン語 venio 「私は来ます」。この種の場合を除けば文の主な構成要素は主語と述語であり、その述語はロシア語 дом нов 「その家は新しい」のように名詞類<sup>G</sup> のこともあるし、ロシア語 Пётр придёт 「ピエールはまもなく着きます」のように動詞のこともある。主語と述語は文の中核語(mot principal)である。ラテン語の aedifico domum 「私は家を建てています」、eo Romam 「私はローマへ行きます」、venio Roma 「私はローマから来ます」、habito Romae 「私はローマに住んでいます」などのように、文にはさらに他の中核語が含まれることもある。文とはなんらかの考えを表現するために作られ、そしてその考えの本質的な部分を表すものが中核語である。

しかしながら文は中核語だけを用いて作られるわけではない。たいていの場合、他にそれら中核語の意味するところを限定して明確にする語が必要となる。laissez venir à moi les petits enfants (幼子達を私のところに来させていいですよ) という文があるでしょう。フランス語の正書法ではここに7つの異なる語が区別される。さてここで、もはや単なる文法的要素でしかない à moi の à や、同じくある種の文法的手段である冠詞 les をとりあえずおくと、それぞれ別の一語と組をなすものとして laissez と petits のふたつが残る。どちらの語もそれぞれなにかを意味しているが、上の文だとそれは隣接している語と組にしてはじめて現れてくる。たとえば laissez cela (それは放っておきなさい) という文であれば laissez は中核語と見なすことができるが、上の文での laissez はある意味で助動

詞といえ*laissez venir*でひとまとまりをなす<sup>H</sup>。*petit*もたとえば*apportez le petit paquet* ((隣にある大きい方ではなく)<sup>I</sup>小さい方の包みを運んでください)というときは*petit*にも独立した意味が認められ、さらに形容詞も中核語になれるとするならば、独立した意味どころか*petit*は中核語ということになるが、上の文での*petits*は*enfants*に付随する特質を示すにすぎない<sup>J</sup>。というわけで中核語の他に付随語 (*mot accessoire*) というものがある。ある文中核語になっている語には、かならず付随語として使われているような文が存在する。*il vient me dire cela!* (私にそれを言いに彼は来るんだ) という感嘆文では*venir*<sup>K</sup>も付随語である。また中核語から付随語に至るまでの間にはありとあらゆる中間段階がある。先に挙げた文の*laissez*には*faites le venir* (彼を来させてください) の*faire*<sup>L</sup>ほど付随語らしさはない。とはいえどんな文においても、中核語と、程度の差こそあれ付随語であるものとははっきり区別することが重要である。

さて、ある語が付随的なものになると、その結果2種類の質的变化がおこる。ひとつは意味に関係した変化、もうひとつは発音に関係した変化である。

言語を構成する要素は、使われるたびにその表現効果を失っていき、安易に繰り返されるようになっていく。ひとつの語が2回ともまったく同じ鮮烈さを持って耳に届いたり口にされることはない。習慣にはそういうことがつきものである。新しい語はそれをはじめて耳にした者に生き生きとした強い印象を与えるが、それが繰り返し使われるようになったとたんそのような力は失われ、やがてずっと前から通用しているものとなら変わらない効果しか与えられなくなってしまう。これがもっとよくわかるのは語を組み合わせる場合である。人は言葉を使うとき、特に書くとき紋切り型の表現「クリシェ」を利用する。ありきたりのふたつの語も、それがはじめて結びつけられた場合、あるいは少なくともひとつとは違う結び付け方をされた場合、真新しい語のような印象を与える。はるか昔のホラティウスも多くの実例をあげて、語の新しい組み合わせ*junctura nova*<sup>M</sup>がもたらす効果について指摘している。文体というか表現に気を配る弁論家や作家は、聴衆や読者に感銘を与えるようなありきたりでない語の組み合わせを何よりも好む。たいていの言葉は、文

章語として使われるようになってからわずか数十年で文学活動により使い古されてしまう。また今やヨーロッパの大言語のいずれにおいても、作家にはありきたりかわざとらしいか、どちらかの書き方しか残されていないとも言えそうな状況になっている。これらはいずれもひとつの言語において可能な新しい語の組み合わせが実際には有限であるためと思われる。

というわけで、語の組み合わせも頻繁に使われるようになって目にする機会が多くなると、表現に力がなくなってきて、話し手の方もただ単にそれを繰り返して使っているだけになってしまう。je laisse venir<sup>N</sup>においても、je laisseとvenirがそれぞれ明確に個をなし、このような構文でもlaisser<sup>O</sup>自体の意味が完全に残っていた時期もあった。しかしlaisserと不定詞の組み合わせが習慣化したため、laisserの弱化が急速に進むこととなり、独立した意味を失ったlaisserは中核語に付随する助動詞の一種となった。とはいえ、このlaisserが表わす概念はまだ具体的ではっきりした特徴を持っており、意味の面でも形の面でも自立していることは明らかなので、まだ文法機能を果たす要素へすっかり移行してしまったとはいえない。

ある語が別の語と一組になり、さらにいつもその同じ組み合わせで使われる用法が出てくると、その組み合わせにおいてその語から具体的な意味の一部が失われることになる。例としてpied（足）を見よう。この語は単独で使われた場合、人体のうちで形態的にきわめて特徴のはっきりした、しかも範囲も非常に明確なある部位をさす。ところがle pied d'une table（テーブルの足）、le pied d'une chaise（椅子の足）、le pied d'une lampe（ランプの足）、le pied d'une montagne（山のすそ）などのように物体を表す名詞と結びつく具体的な意味をすっかり失い、その物体のうちで支えとして機能し、かつその物体の下にある面と接触している部分というような抽象的な意味だけになる。こういう場合に比喩という用語がふさわしくないことはM. Wundtが明らかにしたとおりであるが、残念ながら比喩とされることがいまだにある。ここでは比喩というより別の語とする方が正しい。たとえばロシア語では、家具の「足」をさす場合にはнога「足」ではなくその派生語ножкаを使うのである。以上と反対に、複数の語からなる表現は、それを構成している各語の意味の単純

合計から期待されるよりも具体的ではっきりした意味を持つことが多い。pied de lampe (ランプの足)と言うとき、もう上で定義したような抽象的な意味合いでのpied (足)やlampe (ランプ)そのものはほとんど意識することなく、名詞pied de lampeがさす独特な形の対象のことを考える。工夫すれば組み合わせられている要素ふたつを別個に思い浮かべて、そこから明瞭とはいえないにしてもなんらかの観念を得ることはできるかもしれないが。しかし要はpied de lampeは、分かちがたいひとつのものをさす、分かちがたいひとつの語と同一視できるということなのである。このような語の組み合わせがさらに進むと、その一方の語に本来あるべき文法的特徴が現れなくなることもある。トルコ語では、総督所有の庭園について話をしようというとき、聞き手がその庭園のことをよく知らなければ属格の印-in<sup>P</sup>を付けてpaşanın bahçesi「総督の庭園」と言うが、この庭園がよく知られている地域にいるなら、paşaという語はもう曲用させず屈折語尾をひとつしか含まないpaşa bahçesi (総督庭園)と言う<sup>Q</sup>。ここにあるのはもはやふたつの異なる語ではなく、合わせてひとつになった語句である。中国語やベトナム語など接辞がない極東の言語では派生によって名詞を作り出すことができないので、人や物を表す様々な名詞を調達するのにふたつの語を結合するという方法をとるが、その際どちらの語からも本来の意味が失われる。たとえばベトナム語では、phép「規則」とtoán「数える」から「計算、算術」を表すphép toánが得られ、ban「撃つ」とではphép ban「射撃」など。同じようにthay「主」が自由業を表す名詞を作るので、phép thuocが「医学」ならthay thuocは「医者」となる。以上をまとめると、語の組み合わせの習慣化により、各語が持っていた表現上の効果や、組み合わせることによって生じた表現効果、さらには各語が本来持っていた具体的意味までもが失われる、ということになる。

このように意味的にひとまとまりとなった語句は隣接していることが多く、発音の上でもほとんどひとつの長い語のようになる。知られているとおり、文を普通に発音するときの語の区切り方と、現代語の標準的な書き方で語の区切り方は一致していない。書く場合には、単独でなにか文における機能を果たせる要素はすべて他の要素から分離させるという習慣が定着している。このような書き方はわかりやすく実用性



も高いが、その根拠となっているのはもっぱら文内で語が果たす機能や特性であり発音は一切考慮されていない。たとえばフランス語の冠詞はいかなる場合でも単独で用いられることはなく、常に名詞句の一部なのであるが、冠詞は冠詞が限定している名詞と離して *les enfants* (子供達)、*les petits enfants* (幼子達)、*les pauvres petits enfants* (あわれな幼子達) などと言えるので分かち書きされる。発音からみれば上の組み合わせの *les enfants*, *les petits*, *les pauvres* はいずれも単一の語である。音声的な語の定義と統語的な語の定義は重なり合わない。ひとまとまりをなす複数の語は、程度の差はあれ音声的には単一語化していく傾向がある。

さて、おなじひとつの要素でも、それが含まれている語が長くなればなるほど短く発音されることが様々な事例から明らかとなっている。フランス語で、*pâté* (パテ) の *â* は *pâte* (生地) の *â* よりはるかに短い、*pâtissier* (菓子職人) 特に *pâtisserie* (菓子) の *â* は *pâté* の *â* よりも短い。このような音の短縮は重大な変化をひきおこす。すなわち、母音は音が短くなるとその響きが変化することが多いのである。短くなった母音は口の開きをより小さくして発音される傾向があり、またすでに口の開きが小さい母音は消失することもある。他の語に結びついた付随語の音が短くなったり変わったりすることが多いのはこのためである。しかも付随語となると、音の短縮も理由のひとつであるが、発音の際特に力を込めないことや、聞く方も特に注意して耳を傾けないこともあって、軽く扱われるようになり力強さを失っていき、もはやしっかり区切って発音されることがなくなってしまふ。付随語が以上の理由から音声的に通常とは異なる扱いをうけることは言語の歴史にも現れている。「音法則」に例外なしという原則に反するものとして、付随語に見られる特別な扱いが持ち出されることがこれまで度々あったが、それが論拠として成り立たないことは明らかである。付随語は特殊な発音しか選択できないような特殊な環境に置かれているのである。中核語要素が一切変化しない場合やまったく別の変化を受ける際に、短く弱く発音される付随語要素は弱化したり消失したりすることがある。英語で、語頭の *th* はほとんどすべての語で無声(硬い *th* という)であるが、冠詞の *the* では有声(柔らかい *th*)化している。かつてこれが「音法則」不変の原理に反する例として挙げられたこともあったが、現在では付随語の語頭にある有声子

音は付随語特有の弱化( *affaiblissement* )作用を受けやすいことがわかっている。この現象は英語以外にも、たとえばアイルランド語や北欧語やアルメニア語で見られ、さらにこれは印欧語に特有のものではなく、サモアのポリネシア語などにも見られる。

付随語には徹底的な音変化がおこることもある。もしゴート語の *himma daga* 「ここにある日、きょう」という形式が知られていないとしたら、かつての *hiu tagu* 「ここにある日」が古高ドイツ語の *hiutu* 「きょう」( 現代ドイツ語 *heute* ) や古サクソン語の *hiudu* 「きょう」になったという説は信じにくいであろう。これと平行的な変化が *hiu jârû* 「今年」から *hiuru* ( 現代ドイツ語 *heuer* ) とか、*hînaht* 「今夜」から中高ドイツ語 *hînet* や現代バイエルン方言 *heint* において見られるが、これも上の説を裏付けるものである。考えていることの一番重要な部分、つまり「もっとも近くにある」という情報を含んでいるのは指示詞であるが、その名詞句の先頭にある指示詞にアクセントが置かれたため、語句の残り部分がほとんど消失してしまい識別できなくなってしまったのである。もともとは中核語と同形だった場合ですら、付随語となるともはや中核語と等しい形は保たれない。古ギリシア語の一方言であるボイオティア方言では、長い *-a-* の語は複数属格で縮約なしの *-âôn* であるが、対応する冠詞では *-âôn* が *-ôn* と縮約してしまい、たとえば *tôn drakhmâôn<sup>R</sup>* となる。ひとつの統一された屈折形の代わりに、中核語用にひとつ冠詞用にまたひとつと、ふたつの異なる屈折形が存在している。

意味の弱化と付随語の語形の弱化は互いにつきものであり、両方の弱体化が充分に進むと、付随語は本来の意味を失い中核語に添えられて文法的機能を果たすだけの要素となる。語から文法要素への移行完了である。

ここまでで、かつて自立語であったものがしだいに変質し文法形式となるのに必要なプロセスを概観したことになるが、それには発音の弱化、語の具体的意味の弱化、語やひとまとめにされた語の表現効果の弱化があった。しかしそのようなプロセス自体の端緒となるのは、力ある言葉の必要性、表現効果に対する欲求である。否定表現がたどった歴史から

はまさにこの原理が読み取れる。

印欧語にはかつて否定を表すために共通の小さな付随語neがあり、それはたとえばサンスクリット語のna、スラブ諸語やリトアニア語のne、ゴート語のniにはっきり残っている。しかしこの非常に短い語はアクセントを失いがちであり、さらにロシア語やリトアニア語ではそれがかかっている中核語との結びつきが緊密になり、急激に表現効果が弱まってしまった。否定を強調する必要のあるとき 付け加えれば、言葉を使うのは他人になんらかの形で働きかけるためであり、そして他人の心に訴えかけるために必要な行為として、話し手はほぼ常に強調する必要を感じるものである、なにか他の語で否定のneを強めるようになった。たとえばラテン語でもこのようなことが起きている。「～ない」と言うために、ドイツ語で「～ない・ひとつ」すなわちkeinと言うようになったのと同じく、古ラテン語でもneと言う代わりにnoenum「～ない・ひとつ」と言った。付随語となったnoenumは付随語特有の扱われ方を経てnônとなった。しかしこの変化のためnônが「～ない・ひとつ」だったことが見ただけではわからなくなり、歴史時代にはいるとラテン語のnônにはもはやサンスクリット語のnaやスラブ諸語のneやゴート語のniと同程度の表現効果しか感じられなくなっていた。そこでフランス語では、nônから付随語特有の変化過程を経て生じた否定のneをpas(～ない)やpoint(少しも)やmie(まったく)などの短い語を使って強調するようになった。pasが否定表現の付随語として機能している語句で本来の意味を失い、それはpasが単独語のときには完全に保たれている<sup>S</sup>、その結果pasがそれ自身否定語となって否定の意味を表すようになり、続いて今度はpasが表現効果を失ったため付随語による強調がまた新たに必要になり、そこでpas du tout(全然～ない)とかabsolument pas(全然～ない)のような言い方をしたり、一層表現に力のある感嘆表現として俗語的とはいえ最近よくil n'est pas venu(彼は来なかった)の代わりに耳にするtu penses, s'il est venu!(彼が来たかどうかは知ってるの通りだよ)のようなまったく新しい表現に頼るようになった次第は周知の通りである。ドイツ語の否定nichtの意味も語源的には「～ない・ひとつのもの」であり、その歴史はラテン語やフランス語の否定表現と平行的なものである。言葉はこのようにある種の螺旋的発達過程をたどる。

すなわち、強い表現を得るために付随語が追加され、付随語は弱化して表現効果も低下し単なる文法的手段のレベルに落ち、表現効果への欲求から新たに別の語が追加され、またその弱化が始まり、というように際限なく。

今述べたことから、文法的要素に変化した語を使って表わされることが多い文法カテゴリーには、ある種の表現上の特徴がみとめられることがわかる。これは少なくとも接辞のように他の語に密着する性質をもった文法形式が存在する言語においてそうである。中国語や、さらにいうまでもなくベトナム語のような接辞をまったく持たない言語には、空意語などとよばれる付随語が存在し、文法カテゴリーの大半がそれによって表示される。しかし印欧語においては、動詞の現在形やアオリストのようなカテゴリーは事実を単純に表現するだけなので、しだいに密着していく付随語を使って特徴づけるにはあまり適していないと見なされている。もしそういう場合に付随語が関係してくるとすれば、それはあとで見るように弱化過程が最後まで進んだ際の副次的なものでしかない。しかしもっと意味に鮮烈さがあり、したがって特徴のはっきりした強い表現が必要なカテゴリーだと話は変わってくる。この点で完了形と未来形の歴史をたどることは有益である。

「完了」という言葉は、行為の進行状況や持続とか、または単なる行為そのものではなく、行為が完結していることや、行為から生じた結果の方をさすような非常にはっきりした意味をもつカテゴリーに対して使われる。印欧語にはこのような意味を表現するための非常に特徴的な形式があるが、それは独自の屈折語尾や語根母音の体系をもち、さらにギリシア語 *léloipa* 「私は残してきた」のように語根の先頭部分が重複されることが多かった。この形成法は非常に独特で、したがって非常に表現効果が強かったが、印欧語の発達史を通して維持されることはなかった。その理由としては、意味の弱化が生じて表現効果が低下し現在形と区別できなくなった（ラテン語 *memini* 「私は覚えている」やゴート語 *man* 「私は思っている」）こと、あるいは過去形と区別できなくなった（ラテン語 *cecini* 「私は歌った」やゴート語 *haihald* 「私はつかんでいた」）

こと、さらにこの形式の作りが印欧語の古い時期を越えて維持されるにはあまりに独特すぎたこと、つまり文法体系内で生じた全般的な変化により印欧語式完了形の形成が可能となるような状況が失われてしまったことが挙げられる。

しかしそのような形式がなくなって不備が生じてしまった。なぜなら完結した行為をそこから生じた結果まで考慮に入れて表現したいという場合があるからである。この目的のためもっともよく使われるのは名詞的な形式と付随的な動詞を結びつけたものであるが、これは当然といえる。動詞の本義はなんらかの過程を表現することにあるが、完結した行為というのはもうすでに過程とはいえず事物なので、それを表現するのにふさわしいのは動詞よりむしろ名詞というわけである。このような傾向は特に受動態において明らかであり、完了を表すために使われる複合形式がたいていの場合まず受動形式（ラテン語 *dictus est* 「彼は～と言われていた」）、特に非人称形式（*dictum est* 「～と言われていた、人々は～と言っていた」）に現れてくるのもこのためであり、それは歴史時代に先立つ時代からすでにそうであった（付け加えると、このような表現方法はラテン語やオスク・ウンブリア諸語だけでなく、革新ということに関して比較的古風な点の多いケルト語にも共通して見られる）。

まったく作りの違う能動形式 *habeo dictum* 「私は言った」が出現するのは、もっとずっと後のロマンス諸語が形成されてからのことである。口で言ったことが私の手元にある、という意味であるから、この形式がロマンス諸語にできた当時、その表現効果はとても強いものだった。この表現方法が最も古い時期より後のゲルマン諸語にも見られること（紀元4世紀のゴート語にはまだその形跡はない）は特に注目に値するが、それはおそらくこのラテン語の簡便かつ印象的な言い方をまねたものである。ここで、語の組み合わせ方の模倣があるからといって、ラテン語からゲルマン諸語へ文法形式の借用があった結論することはできない。まさしく文法形式と呼べるものが借用されることはほとんどない。模倣が行われたであろう時点では、まだ *habeo dictum* にはふたつの独立した語が含まれているとはっきり意識されていたと考えられ、つまりそれはまだ文法形式ではなく、語の組み合わせでしかなかったのである。時とともに *j'ai dit*<sup>T</sup>（私は言った）の型は一体化が進み、フランス語で

は早くからそれは単に完結した行為を意味するだけの手段となっ  
てまい、もはやaiやdit自体の意味が独立して意識されることは  
なくなった。その後この形式は表現効果を失い、完了の意味も消  
えて単なる過去形のひとつとなった。そしてその結果単純過去形  
je ditと競合が生じているが、単純過去形は語形成が一層複雑  
かつ特殊で、屈折の仕方も独特で ( nous dîmes, vous dites, ils  
dirent ( 私達は・あなた方は・彼らは言った ))、そのくせ多義  
になることも多い ( je dis, il dit, vous ditesは現在にも過去  
にも使われる ) というように明瞭さの点ではるかに劣るので廃れ  
つつある。今ではパリと、パリと同じようなフランス語が話され  
ているすべての地域、すなわちパリを中心に半径 2~300 キロの  
範囲においては単純過去形は全く使われなくなっている。j'ai  
dit型は意味の弱化が徐々に進み、最後には完了の意味の全く残  
っていない単純な過去形になった。これで一巡であるから、フ  
ランス語では今後完了表現のためあらたな言い回しを探し求め  
ることになるだろうが、新表現誕生の兆しはまだ見えていない。

ラテン語やロマンス諸語、特にフランス語において観察され  
た現象に似たものは他にも多くの言語でそれぞれ個別に発生し  
ている。たとえばペルシア語では、印欧語式完了形はすでに  
Darius の時代、つまり紀元前 6 世紀末以降ほとんど使われ  
なくなっており、その部分を完了の意味合いが非常に明確な  
受動態型の名詞的形式が補っていた。なしとげられたものを表  
すのに ima tya manâ krtam 「私によって行われたものがここ  
にある」と言ったが、ここで krtam は「fait (「する」の過去分  
詞)」である。一方、古ペルシア語には行為を表現するための  
単純過去形がまだいくつか残っており、事実をまったくそのま  
ま表現すべき時はアオリストが使われた ( akumâ 「私達は行  
った」)。その後この単純過去形は姿を消し、古い複合形式  
だけが残ったのであるが、それは能動態的なものに変質した。  
今のペルシア語で kard は「彼は行った」である。man kardam  
「私は行った」の man が主格と見なされるようになったので  
kardam は屈折するようになり、かつて過去分詞であったこと  
を全く感じさせないひとつの完結した形式であるかのような  
印象を与えている。意味についていえば kardam は単なる過去  
であり、現代フランス語の j'ai fait 同様もはや完了の意味  
を持たない。

まったく違う形をとってはいるがスラブ諸語にも完全に平  
行的な発

達の例がある。古い時期のスラブ諸語には budixŭ 「私は呼び起こした」のような単純過去形と、完了の意味を持つ複合過去形 budilŭ jesmĭ 「私は呼び起こした」がある(文字通りには「私が呼び起こした者である」)。この完了の意味は、もうすでに文字になって残っている最初期の頃に弱まっており、現代のスラブ諸語におけるロシア語 возбуди́л(私は呼び起こした)やポーランド語 wzbudziłem(私は呼び起こした)のような形式は、純粹に過去をそのまま表現するだけの単純形式である。スラブ諸語のうちの主なもの、特にロシア語とポーランド語では、このようにかつての複合過去形とは異質の過去形があるというだけではない。かなり前から単純過去形が使われなくなっているのである。

というわけで、いくつか言語を変えても発達の仕方は同じであり、いまざっと見たような例をさらに増やしていくのは難しいことではないであろう。完了は名詞的な特徴を備えた複合形式によって表現されるようになることが多く、またそれは広く使われるようになったとたん完了の意味を失っていくという傾向があり、その表現効果は単純な過去形と同程度にまで低下する。同時に名詞的特徴も失われ動詞形のように見えてくる。ここにいたってかつての単純過去形は、全体的により規則的なこの形式に置き換えられていくことが多い。

いま完了に関して述べたのと同じようなことは未来形や継続相現在形についても言えよう。

動詞の活用が複雑な言語でも、未来の行為を表現するための特別な文法形式を持たないことがある。セム語族や大多数の古期印欧語がその例である。古いゲルマン諸語にも未来形はなく、現在でもなおドイツ語に未来形があるとは言いにくい。未来の行為を表現するのに、自分になにかする意志があることを表す形式が利用されることが多いが、すべての印欧語の源となった印欧祖語にはそのような意味を持つ文法形式として接続法があった。このため、たとえばラテン語では起源からすると接続法である erit(「～である」の未来形3人称単数)や dicet(「言う」の未来形3人称単数)に未来の意味が生じ、そして歴史時代のラテン語ではもう他の意味はなくなってしまった。比較言語学によってやっと先史時代に erit や dicet が接続法だったことが明らかとなったのである。印欧

語のいくつかの言語においてはもっと時代が下ってから、動詞vouloir（～したい）が未来を表現する助動詞へと発達している。je veux faire（私は～したい）という言い方は大多数のフランス人にとって、もう一種の未来形と同じといえるほど意味の弱化が進んだ形式である。英語のI will makeはそのような発達がもっと進んだものである。南スラブ諸語や現代ギリシャ語では、vouloirを意味する動詞を利用して未来の表現が作られるが、形式の上でも意味の上でも弱化が進んでしまっていて、言語学者でもなければその動詞をもう識別できなくなっている。たとえばギリシャ語ではthelô ina「私は～ということを望む」がthelô na、thena、そして単にthaへと短縮され、もはやvouloir「望む」という意味の動詞が識別できない。この他に、英語のI shall makeや現代西アルメニア語bidi anem「私は（これから）～する」（文字通りには「私は～する必要がある」）のように「devoir（しなければならない）」を意味する語が使われることもある。付随語は短縮されたり見分けがつかなくなったりするわけであるが、アルメニア語話者の多くもbidiではなく単にdiと言っているのを耳にする。古ラテン語の未来形の衰退がかなり進んで表現効果が非常に低下したときロマンス諸語に生じた未来形もこの方法によっている。(je) ferai<sup>U</sup>（私は（これから）～する）の元となったfacere habeoは「私には～することがある」すなわち「私は～しなければならない」を意味する。不定詞と「持っている」を意味する動詞とが一体化し、avoir（持っている）は独立した動詞の時とは違う独特な屈折をするようになった。フランス人はje finirai<sup>V</sup>（私は（これから）終える）と言うときfinirやaiのことは意識しないし、nous finirons<sup>W</sup>（私達は（これから）終える）と言うときもfinirや-onsのことを意識することはありえない。j'aimerai<sup>X</sup>（私は（これから）愛する）やje viendrai（私は（これから）来る）を分析するなどということも考えられない。その後この形式も表現効果を完全に失ってしまった。未来について話すときは願望や予測や必要性など独特のニュアンスをあわせて表現したいことがほとんどなので、フランス語ではまだ表現に力のある未来形がいくつか新たに作り直された。近接未来je vais faire（私は～するところである）において、je vaisはもう助動詞にすぎず、もはやaller<sup>Y</sup>（行く）の意味は感じられない。je veux faire（私は～したい）ではまだvouloir<sup>Z</sup>（～したい）の意味



は充分感じられる。je dois faire (私は～しなければならない)のdoisはもう助動詞と考えると差し支えないが、必要性の意味ははっきりしている。j'ai à faire (私は～しなければならない)では、等々。未来形という形式は欠かせないものではないが、ある言語に未来形があれば、それは絶えず作り直されていく。

動詞の活用に時の区別がある場合、現在行われている行為にもそれを表現するため独自の形式が必要となる。ところが行為の持続を強調したいときは複合表現が使われることが多く、そのような表現はのちに単純な形式の出現に至る。je suis faisant(私は～しているところである)型、すなわち英語のI am makingはそれを示す例のひとつである。現代アルメニア語で現在を表現するとき必ず使われる形式も、もはやなんの特別な表現効果を感じられないとはいえ、かつては持続を表現する複合形式であった。ロシア・アルメニア語話者の多くが使う sirum em のような形式は「私は愛し続ける」を意味していた。またトルコ・アルメニア語話者の多くが使う g sirem という形式はある複合形式が変化してできたものである。kay ew sirê「彼は(そこに)おり、そして愛している」において、kay ew は ku へ、ku は kə (əは無音の e の一種)と短縮され、この地域のアルメニア語話者の特徴であるが、古い k が g と発音されるようになっていく。kay ew sirê では行為の持続がはっきりと表現されていたが、現代の g sirem という形式にはもはやフランス語の il aime (彼は愛している)と大差ない表現効果しかなく、話し手の方でも分けようのないひとつの形式と意識している。

この種の例をさらに増やしていくことは難しくないのであろう。表現効果を求めて常に新しい組み合わせが創造されるが、それは使われるうちに表現効果を失っていき、文法形式として機能するようになると表現に力はなくなっている。

以上のことから、総合的言語とか分析的言語という言い方がいかに理にかなっていないかわかる。複合的な形式はそれを分析するためではなく、表現効果のために使われるのである。一体化した形式は合成するためではなく、習慣化した語の組み合わせが融合した結果一体化した形式となったのである。力を込めて表現したい場合は概念ひとつひとつに別

個の表現が使われる。つまり *je ferai* (私は(これから)~する)とは言わずに、*j'ai la volonté de faire*(私は~をするつもりである)とか *il faut que je fasse* (私が~をすることに疑いはない)とか *je suis sur le point de faire* (ちょうど私は~をするところである)と言うのである。大事なのは聞き手に感じてほしいこと、聞き手に及ぼしたい影響であって理屈ではない。そしてもし *je veux faire* (私は~をしたい)や *je dois faire* (私は~をしなければならぬ)や *je vais faire* (私は~するところである)が、もはや意志とか必要性とか近接性をはっきり表さないとしたら、それは組み合わせが平凡になって *veux* や *dois* や *vais* が本来の意味とか表現の力強さを失ったためであり、また後続の不定詞と一体化して単純な助動詞になったためである。ローマ人は *facere habeo* と言ったときそれを分析したわけではなく、それはフランス人が *je ferai* と言うときそれを合成したのではないのと同じである。分析とか合成とかは理屈を考えたときの用語であり、本当の成り行きをすっかり見誤らせてしまう。「合成」は語を組み合わせさせて使っていれば自然に、そして必然的に現れてくることなのである。

文法的要素に変化しやすいのは語だけでなく、さらに語のまとめ方もまた文法的なことを表示する方法となりえる。名詞の文法的機能がそれぞれの名詞の語形で示されていたラテン語には、通常使われる語順というものが無い。「ピエールがパウルを殴っている」を表すために *Petrus Paulum caedit* とか *Paulum Petrus caedit* とか *caedit Petrus Paulum* とか *caedit Paulum Petrus* 等々の言い方ができる。語順は重要でないということではなく、語順は様々なニュアンスを表すために使われるのである。*Petrus* を前に置いたり *Paulum* を前に置いたりして、一方の語に注意を向けさせるのである。しかし並べ方が文法的機能を表示することはまったく無い。反対にフランス語や英語では、各語の位置が文法的機能を表示しており、*Pierre bat Paul* (ピエールがパウルを殴っている)で *Pierre* と *Paul* の位置を入れ替えたとしても、このふたつの語の文法的機能も入れ替わってしまう。なんらかの理由によって習慣化した語の配列が、ここにおいて「形態素」的特性、すなわち文法カテゴリー標示物の特性を帯びるようになったわけである。語順はラテン語で表現上の機能を果たしていたが、

それが文法上の機能を果たすようにすっかり変わってしまった<sup>2</sup>。この現象は様々な語の「文法化」と同種のものである。習慣が持つ効果により「形態素」的な特性を帯びるようになったのが、他の語と組み合わせで使われるひとつの語である代わりに語のまとめ方であるだけの話である。ここでもまた、まさに新しい文法的手段が創造されたのであり、なにかの形が変わっただけなのではない。文の各部分がおたがいどういう関係にあるか語順を利用して示すというのは、すべてフランス語や英語で創造されたものであり、ラテン語にも古いゲルマン諸語にも似たようなものは全く見あたらない。

#### 訳者付記

本稿は Antoine Meillet による論文 *L'évolution des formes grammaticales* の全訳である。底本は 1921 年に発行された論文集 *Linguistique historique et linguistique générale*, Paris: Champion, 130-148 である。初出は原注 1 のとおり 1912 年発行の *Scientia* であるがこれは入手できなかった。

---

<sup>2</sup> 文法形式の創造に際して感情が果たす役割については、Bally の著作 *la Stylistique, le Précis et le Traité* や *Le langage et la vie*、もっと最近のものとしては Leo Spitzer の論文集 *Aufsätze zur romanischen Syntax und Stylistik* (Halle, 1918) を見られたい。

- <sup>A</sup> (以下訳注にはアルファベットを用いる) 原著にある対訳は「 」、訳者が補った対訳は( )に入れる。
- <sup>B</sup> 正しくはvous dites。
- <sup>C</sup> 原著には明記されていないが旧約聖書・出エジプト記3章14節。「わたしはある。わたしはあるという者だ」(日本聖書協会・新共同訳)、「わたしは、有って有る者」(同・口語訳)。
- <sup>D</sup> 福本喜之助訳で講談社から1965年と1993年に出ている。
- <sup>E</sup> 以下原文のロシア語はすべてキリル文字に改めた。
- <sup>F</sup> 以下原文のラテン語で半母音のuとiはvとjに直した。
- <sup>G</sup> 原文のnomはラテン語のnomen(名詞と形容詞を合わせた品詞・ラテン語などでは名詞と形容詞は同じように曲用するため)と同じ意味で使っていると思われる。
- <sup>H</sup> laissezはlaisser(～させておく)の命令形2人称複数、venir(来る)は原形で、合わせて「(来たがっている～を)来させてください」。
- <sup>I</sup> (隣に...ではなく)は原著者による。
- <sup>J</sup> enfantが戸籍などでいう「子」の意味で使われているのではなく、「幼い子ども・児童」の意味で使われていればpetit「小さい」のは当たり前である。
- <sup>K</sup> vientはvenirの現在形3人称単数。
- <sup>L</sup> faitesはfaireの命令形2人称複数。
- <sup>M</sup> ラテン語で、直訳すれば「新しい結合」。
- <sup>N</sup> je laisseはlaisser(～させておく)の現在形1人称単数、venir(来る)は原形。本来はこれ以外に目的格(対格)におかれたvenirの意味上の主語を入れて「私は(来たがっている)～を来させる」。65ページ下段参照。
- <sup>O</sup> 動詞の原形と組み合わせていないlaisserには、他動詞として「残す、放っておく、ゆだねる」などの意味がある。
- <sup>P</sup> 以下原文のトルコ語は現代綴りに直した。
- <sup>Q</sup> 単独語としてはpaşaが「将軍」でbahçeが「庭園」。(n)mは日本語の「～の」に対応し、(s)iは前にある別の名詞に限定されていることを表す語尾(日本語に対応するものはない)。
- <sup>R</sup> ドラクマ(貨幣単位)の複数属格。
- <sup>S</sup> pasには普通名詞として「一步、歩み」などの意味がある。
- <sup>T</sup> j'aiはavoir(持っている)の現在形1人称単数、ditはdire(言う)の過去分詞。ラテン語habeo dictumと同じ作り。
- <sup>U</sup> faire(する)の未来形1人称単数形。
- <sup>V</sup> je finiraiはfinir(終える)の未来形1人称単数、aiはavoirの現在形1人称単数。
- <sup>W</sup> nous finironsはfinirの未来形1人称複数、onsはavoirの現在形1人称複数。
- <sup>X</sup> j'aimeraiはaimer(愛する)の、je viendraiはvenir(来る)の未来形1人称単数。
- <sup>Y</sup> vaisはallerの現在形1人称単数。
- <sup>Z</sup> veuxはvouloirの現在形1人称単数。